

兵庫・宅原遺跡（豊浦地区）

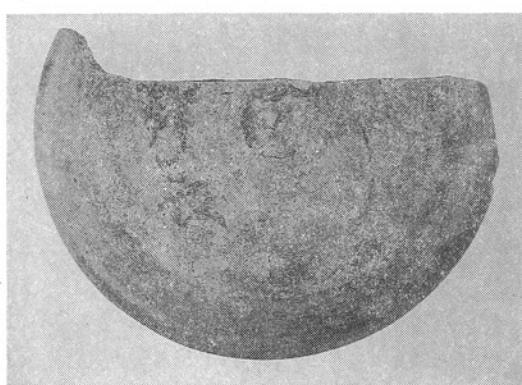
えいばら
とようら

いる（写真参照）。また七世紀代の木製仮面、人形、松明、馬の下頸骨などの祭祀遺物を包含した溝などを検出しており、地方官衙的集落と考えられる。

- 1 所在地 兵庫県神戸市北区長尾町宅原字豊浦
- 2 調査期間 一九八七年（昭62）四月～五月
- 3 発掘機関 妙見山麓遺跡調査会
- 4 調査担当者 山仲 進
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 八～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

宅原遺跡は、六甲山地の北側三田盆地に近い長尾川流域に位置する古代から中世にいたる遺跡群である。圃場整備に伴う発掘調査が

一九八三年から継続して行なわれており、流域の全体をカバーする綿密な調査がすすめられている。当地域は古代においては摂津国有馬郡幡多郷に属するが、これまでの調査で「評」「五十戸」、今回の調査で「郷長」などの墨書き器が出土して



木簡の出土した遺跡は、南から北へのびる舌状台地の東側傾斜面にあり、奈良・平安時代の遺構と複合して、中世の掘立柱建物群、溝、土坑、井戸等が検出されている。調査範囲が限られたため全体を明らかにしてはいないが、中世の遺構部分には掘立柱建物とそれに付属する礫積みの井戸があり、それらを堀と浅い溝で方形に囲む屋敷取りが考えられる。木簡は堀のさらに南外側にある東西方向の溝の底から出土した。この溝については、延長八mを検出したのみであるが、上幅一・七m、底幅〇・七m、深さ〇・七五mで、断面はゆるいU字状を呈す。溝底にわずかに泥土が堆積しており、この泥土中から呪符木簡一点と刀子状木製品二点がかたまつて出土した。その他にも若干の木片などがみられるが、土器類は全く出土していない。堀に

沿った浅い溝とこの溝との間は幅一・五mの平坦面で道路、溝の南側は一段低くなつており、おそらく水田と考えられる。一三世紀代における農家のあり方を示す一例として注目される。また隣接地点を神戸市教育委員会が調査し、掘立柱建物と井戸を検出しており、

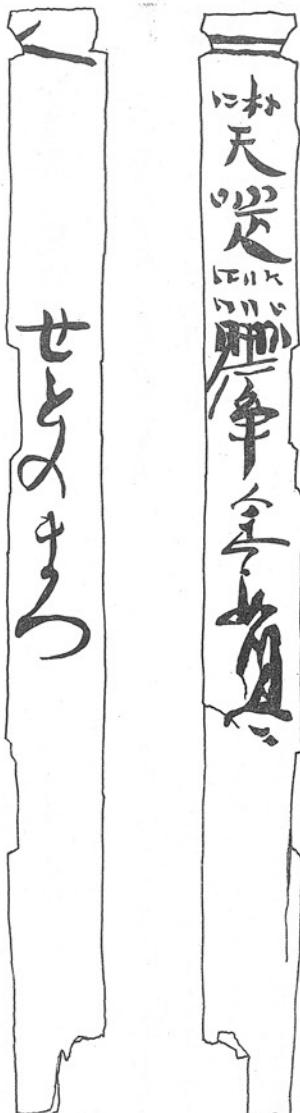
井戸内から長さ六五cmの長大な呪符木簡が出土している(『木簡研究』一〇)。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「▽咄天哩 (符籙) □急々如律令」

・「▽
せとのまつ
」 221×21×3 032

木簡は上端の左右に切り込みを入れ、その部分に横線を一本描いて裏側にもまわっている。下端は平らに切るが片側が欠損している。



北斗星を示す天哩の文字の下に符籙があり、その下の一字は「争」ともみえる。裏面は平仮名で意味不明であるが、呪咀の対象者または物を指示しているものと考えられる。

9 関係文献

妙見山麓遺跡調査会『宅原遺跡・宮之元地区の調査(一九八六年)』(一九八八年)

(山仲 進)